OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	七字切りの＜いろは＞
Author(s)	山田, 昇平
Citation	詞林. 2014, 56, p. 26-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

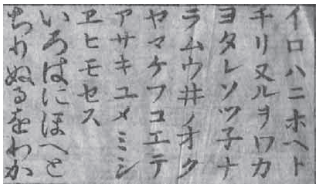
The University of Osaka

七字切りの〈いろは〉

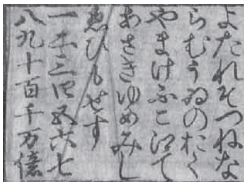
山田　昇平

一．歌の形をとらない手習い歌

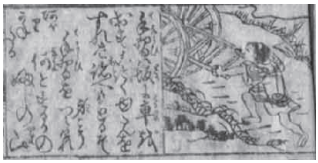
いわゆる〈いろは〉は、日本の伝統的な文字学習の用途に用いられてきた手習い歌である。これはいうまでもなく、四十七文字の仮名を七五調の今様体の歌に仕立てたもので、近代以前においては、この歌を手本に仮名が学ばれた。近世後期に刊行された、大衆向けの教養書の頭書から例を示そう。（句読点は私意による。以下同様。）



イロハニホヘト
チリヌルヲワカ
ヨタレソツネナ
ラムウヰノオク
ヤマケフコエテ
アサキユメミシ
ヱヒモセス
いろはにほへと
ちりぬるをわか

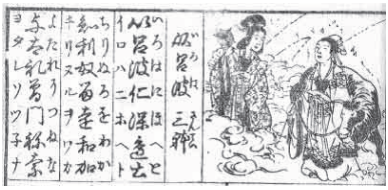


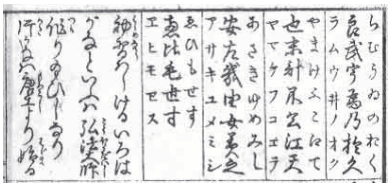
よたれそつねな
らむうゐのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす
一二三四五六七
八九十百千万億



手習は坂に車を
おすことく、ゆたんを
すれば後へもとるぞ。
手習を
何とするかの
ふじの山
あがりかねたる
身こそつらけれ

『文武寶林古状大成』近世後期ごろ刊〔1〕　一丁裏―二丁表





以呂波三躰
いろはにほへと
以呂波仁保辺土
イロハニホヘト
ちりぬるをわか
知利奴留遠和加
チリヌルヲワカ
よたれそつねな
与太礼曽門祢奈
ヨタレソツネナ
らむうゐのおく
良武宇為乃於久
ラムウヰノオク
やまけふこえて
也末計不公江天
ヤマケフコエテ
あさきゆめみし
安左幾由女美之
アサキユメミシ
ゑひもせす
恵比毛世寸
エヒモセス

初習はしけるいろは
がなといふは弘法大師
作り給ひしなり。
片かなは唐土より始る。

『女寺子調法記』　文化三（一八〇六）年刊[2]
「今川」十一丁裏―十二丁表

前者にみられる、〈いろは〉の一覧に続いて手習いの心得が述べられる、という構成からは、手習いのための〈いろは〉が、如何に基礎的なものであったかが窺えよう。後者では、三種の仮名字体を示したのち、「初習はしけるいろはがな」の起源について触れる。「いろはがな」は、近世期を中心にしばしば見られる、ひらがなの異称とされるものであるが、この名称自体が仮名学習の場における、〈いろは〉の重要性を物語るものといえよう。

このようなことは、既に知られたことであり、わざわざ指摘するようなことではないのかもしれない。しかし、ここで注意を向けたいのは、先にみた『文武寶林古状大成』や『女寺子調法記』といった、ありふれたものに書かれる〈いろは〉が、ことごとく七字ごとに改行されており、七五調の今様体の韻律を無視している点である。このような七字切りの〈いろは〉は、取り分けて珍しいものではないとされるが[3]、これが珍しくないということ自体を考えなくてはならない。

本稿では、文字生活において、重要な教材であった〈いろ

は〉が、人々の間でどのように扱われていたのかを窺い知ることを目的とする。具体的には、七字切りの〈いろは〉がどのように用いられてきたのか、一方の七五調のそれとはどのような関係にあったのか、といった、〈いろは〉使用の実態を、資料上から追って行く。

二、〈いろは〉の読み様

まず、七字切りの〈いろは〉と七五調の〈いろは〉に、どのような違いがあったのかを確認しておこう。先には、近世後期ごろの一般的な教養書に書かれる頭書をみたが、次には近世前期の仮名遣い書を挙げておこう。（ここでは本文に対する一部の書き込みなどを略している。）

いろは正字
い以ろ呂は波に仁ほ保へ辺と止
ち知り利ぬ奴る留を遠わ和か加
よ与た太れ礼そ曽つ門ね禰な奈
ら良む武う宇ゐ為の乃お於く久
や也ま末け計ふ不こ己え江て天
あ安さ左き幾ゆ由め女み美し之
ゑ恵ひ比も毛せ世す守

『以呂波抄』元禄九（一六六九）年成立[4] 五丁裏

本書では、まず七字切りの〈いろは〉をもって、仮名の一覧を示している。この点は、先の教養書の頭書にもみられたものだが、本書にはこの他、「詞によみて四句掲に配当する事」の項目がみえ、ここでは七五調に沿って、〈いろは〉の解釈が示される。以下にその一部を引こう。

いろはにほへと。色とは一切の色相也。……（中略）ちりぬるを。其色相いづれとして。常ならず。……（中略）△わかよたれそつねならむ。我世とは万物それ〳〵の。上の我世也。……（以下略） 『以呂波抄』十二丁表―裏

ここでは、七五調での意味を示すだけでなく、「は」「ほ」「へ」に振り仮名を付して、ハ行が転呼した形での読みが示されている。七五調の〈いろは〉が、歌の意味に則した形で、仮名遣いを意識して読まれるものであったことが窺える。同様の区別がみえるものとして、近世前期に出版された重宝記である、『新版増補男重宝記』を引いておく。

一　手ならひ仕やうの事
それ謡は高砂一番を三十日も五十日もならへば名のり出端サシクセ数百番のうたひに通じてすみやかにうたひの上手となるものなり。そのごとく手ならひもいろはをよく書ならへばよろづの字に筆勢うつりて能書となるものなり。大かたに手を書どもいろはをよく書人まれなり。これいときなき時いろはをそこ〳〵に書なしたるまゝにて、はやく外の文字をならふがゆへなり。そも〳〵いろはといふ事、たれ人のつくりはじめたる濫觴をしらず。弘法大師つくり始給ひて、京の一字を

護命僧正書そへ給ふといふ説あれども信用しがたし。たゝそのかみ唇舌牙歯喉の五音の五十字をとり用て生死無常の心を七文字五文字の短哥につくりたるを一字づゝはなして書ていろはと号したるものとみへたり。

色はにほへど　ちりぬるを　わが世　たれぞ常ならん
有為のおく山　けふこえて　あさき夢みし　ゑひもせず
仮名といふは正字をやつしたる物なり。いろはも正字をしり書ときは仮名字よくうつるものなり。

以呂波仁保辺土　知利奴留遠和加
イロハニホヘト　チリヌルヲワカ
与太礼曽津祢奈　良武宇為乃於久
ヨタレソツネナ　ラムウヰノオク
也末計不古江天　安左幾由女美之
ヤマケフコエテ　アサキユメミシ
恵比毛世寸　もろこしの童子は千字文を書ならふ
エヒモセス　わが朝の童子はいろはを書ならふ

『新版増補男重宝記』元禄十五（一六七五）年頃刊[6]
二巻二丁表―三丁表

〈いろは〉の起源に触れ、「生死無常の心を七文字五文字の短哥につくりたる」とした上で、七五調の〈いろは〉を挙げる。一方で、仮名の正字について触れる際には、七字切りを用いる。前者は、漢字表記が混ざることに加えて、「ど」「ぞ」「ず」といった濁音が示され、明らかに歌として書かれたものといえる。

この時代において〈いろは〉は、歌として示すときと、仮名一覧として示すときとでは、その方式を区別しなければならなかったようだ。

また、七字切りの〈いろは〉は、単なる文字一覧としての書き方ではなく、実際に口に上ったものであったらしい。馬渕和夫（一九五五）では、両者に詠唱上の差がある点を指摘している。同論では特に『和字正濫通妨抄』、『和字大観鈔』の記述をもとに、七字切りのものを第一種、七五調のものを第二種として、次の通りにまとめる。

第一種
1、「常のいろはをよむ声」あるいは「常のごとく読む」といわれている。
2、字がならんでいるだけで意味はない。このことを『和字大観鈔』では、「是を隠して」といっている。
3、七音ずつできり、最後だけを五音にする。
4、歌中の「は」「ほ」「へ」「む」「け」「ふ」「ひ」はそのままの字の音でよむ。
5、歌中の「と」「か」「そ」「し」などはにごらずによむが、最後の「す」だけはにごる。

第二種

1、「根本以呂波」とよばれたり、「歌によむ」といわれる。

2、うたとしての意味、すなわち諸行無常云々の意味がある。

3、七五調できる。

4、歌中の「は」「ほ」「へ」「む」「けふ」「ひ」はそれぞれ、「ワ」「オ」「エ」「ン」「キョウ」「イ」とよむ。

5、歌中の「と」「か」「そ」「し」「す」は歌意にしたがって、にごってよむ。

（七十七―八頁）

七五調のものが歌であることを意識した読み方が為されるのに対して、七字切りの〈いろは〉を読むときにはハ行転呼音や濁音のような、歌意に関わる読みの要素は捨てられ、単なる文字の羅列として読まれたようだ。同論で引用された資料のうち、『和字大観鈔』の記述を挙げておく。

いろはの文意

以呂波は。涅槃経の諸行無常。是生懺法。生滅々已。寂滅為楽の。四句の文の意を。つゞり給へるなりとそ。色ハ雖艶散去ルヲ。我世誰ゾ。有常。有為ノ奥山今越テ。浅キ夢不見。酔モ不勢との。哥詞に作り給へり。是を隠して。七つゝにわかち。常のごとく読ましめて。はひふへほの唇音のまゝなるをしらしめ。又哥によみては。はひふへほの文字。わゐうゑおにかよひて。喉音となる事ををしへ。いゐをおえゑの各二字づゝありて。其軽重の使ひわけを。さだめ置きたまふなるは。いづれ甚妙の事に侍る。かゝる深意をしらざる人の。いをえの文字かさなりて。無用の事なるやうにおもへる。いと口惜しき事ならずや。

『和字大観鈔』宝暦四（一七五四）年刊

巻上二十五丁裏―二十六丁裏

本稿の目的に関わるのは、歌としての意味を隠し、「七つゝにわか」たれた〈いろは〉が、「常のごとく読」まれていたということだろう。

なお、やや年代が下るが、伴信友『仮字本末』にも七字切りの〈いろは〉についての記述がみえる。

かくて今その摹本どもを見るに並に尋常のごとく。いろはにほへと云々の字体を。七字づゝはなちがきに六行に書き。ゑひもせすの五字をその次の行に書止めて。さて京字は無くて。別に数の字の一より十までを一行に百千万億の四字を次の行に。行体に書り。おもふに空海この仮字を書さだめて。いつも人の手本にて然書きて与へけるに倣ひて［上に弘法大使年譜に引たる記に。仮名の次キ様と云へるところに喩へる趣をも。こゝに考合すべし。］今の世にもおよび。また其を児童などのひろひよみに。一くだりづゝよみけることの如くなりきたりて。つひに歌のごとくにもあらぬよみざまともなりしものな

るべし。

『仮字本末』嘉永三（一八五九）年刊　巻一　十七表―裏

ここでは七字切りの読み方の起源について触れている。〈いろは〉歌を空海の作と捉え、空海が七字区切りで書いたものが、そのまま伝わり、「児童などのひろひよみに」よって七字一句として読む習慣が生まれたとする。「歌のごとくにもあらぬよみざま」とあるのは、当時、七字切りの〈いろは〉が読みあげられるもので、歌としては意識されていなかったことを意味するのだろう。そして、この読み方こそが当時の「尋常」であった。

これらの記述から、近世期における一般的な〈いろは〉といえば七字切りのものであったと考えられよう。初めにみた教養書類の頭書なども併せ考えると、手習いの場においてもこちらの形が用いられたとみるべきだろう。一方で七五調の形をとる〈いろは〉は、ハ行転呼や濁音など、歌意を意識して読まれるものであった。しかし七字切りのものも読み上げられるものであったようで、しかもこれが通常であったとされている。これら二種の〈いろは〉は目的に応じていずれかが選択されるものだっただろう。

少なくともここに挙げた資料からは、手習いの教材として〈いろは〉を学習する際には、一旦、七五調の読み方を介したのではなく、直接七字切りの形が記憶されていたとみるべきだろう。

三　中世の〈いろは〉

このような状況は、中世においても同様であったようだ。仮名習得の初めを描いた、狂言「いろは」を見てみよう。この演目では親が子に対しての文字を教えようと、〈いろは〉を口ずさんでみせ、子はそれを真似る。

「其しろひくろひの事ではなけれ共、それほどがてんがいたれはよひ、まづいろはといふものからならふ物じや、かうやのこうほう大師のめされた、四十八字のいろはをならへ、よみやうをおしへ申さう　「高野の弘法大師が、四十八で御ざる　「いやさうではなひ、いろはにほへとちるぬるをわか、ゑひもせず京とよめ　「そのことく、たていたに水をかくるやうにはなりまらすまひ程に、としよりの坂をあがることくに、ほつくり〳〵と一字つゝおしへさせられひ

『大蔵虎明本狂言集』正保二（一六四五）年成立

集狂言之類「いろは」

親が子に伝える「いろは」の「よみやう」が「いろはにほへとちるぬるをわか、ゑひもせず京」となっており、そのうちに「ちりぬるをわか」の七字切り特有の区切り方が含まれている。これは七五調ではなく、七字切りを意図していたということなのだろう[7]。但し、これを写す虎明本は、近世初期に成立したものである。慶長二（一五九七）年の生まれであ

る大蔵虎明が、「ちりぬるをわか」と書いていることから、この読み方が中世期から連続しているものとみてもそれほど問題はないと思われるが、この場面が、改変を経ずに、中世の風俗を残しているかにはやや疑問があるかもしれない。しかし、次の『醒睡笑』の一節などからも、やはり広く用いられるのは、七字切りの〈いろは〉であったことが窺えよう。

革草履を履きてありく者、あやまちに足を蹴破り、ことのほか血の流るるを見て、「笑止や、いかに」といふものあれば、「いや苦しからず。昔より『革緒に塗る血』とある程に」。「さてよい作や」と人々ほめければ、「われもほめられんはやすき事なり」とたくみ、足をやぶり血をながす。「何として」と人の問ふ時、「いや、これは大事なし。昔もいろはにほへとと血」

『醒睡笑』元和九（一六二三）年成立「いろはにほへと血」

ここでは、「革草履を履きてありく者」の答えた、『革緒に塗る血』は、七字切りで読んだ場合の第二句目にあたる、「ちりぬるをわか」を元にした一種の地口となっている。このような地口が受け入れられるには、七字ごとで切られた句が、当時の人々に馴染んだものでなければならない。『醒睡笑』の成立も近世の前期であるが、この話自体は更に遡ると考えても良いものだろう。少なくとも、このような地口が可能なほど、七字切りが浸透していたという状況からは、比較的早い時期から、この〈いろは〉の読み方が常であったと考えるのが自然だろう。

一方で、中世期においても、七五調のものは歌意にかかわる場面にあらわれることが多い。例えば『運歩色葉集』の序文に次のような記述がある。

……即チ貴賤同ク通ス書礼一。上下等シク読テ文字ヲ。可レ作二真書一ヲ。依レ之和二涅槃経四句ノ偈ヲ一造レ之ヲ。即チ今ノ色葉是レ也ナリ。彼ノ文ニ云ク。諸行無常　是生滅法　生滅々已　寂滅為楽　此ノ偈ノ意也ナリ。色ハ匂ト散ヌルヲ者。諸行無常之句ニ當ル也。我ガ代誰レソ常ナラン者ハ。是生滅法之句ノ意也。有ー為奥ノ山今日越ヘテハ。生滅々已也。浅キ夢不レ見不醉者。寂滅為楽之意也。終加二京ノ字一ヲ事。表二涅槃常住之都一ヲ。

天正十七年本『運歩色葉集』

天文十七（一五四八）年成立、天正十七（一五八九）年書写

上巻一丁裏―二丁表

同書では、真仮名で書かれた七字切りの〈いろは〉が挙げられ、続いて〈いろは〉の作者説に触る。そして七五調に分けた形で、このような歌意の解釈が示されている。このうちの振り仮名を見ると、「匂」に「ニヲヘ」とあるなど、ハ行転呼での読み方が示されている。これがどの時期に振られたものかは明らかでないが、「我ガ代誰レソ」の「ガ」は本文に属するものであるから、少なくとも天正十七年の書写段階では濁音として読まれていたとみてよいだろう。漢字表記を

取ることからも、歌意をとる場合には、七五調で、ハ行転呼や濁音を意識した読み方をしていたとみるのが自然だろう。このような、〈いろは〉を七五調で区切って、その意味を解釈するといった記事は、覚鑁（嘉保二（一〇九五）年―康治二（一一四三）年）の『密厳諸秘釈』から見られるものとされる[8]。解釈の内容はおくとして、やはりこの時期にも七五調の〈いろは〉も行われていたとみるべきだろう。しかし、これがあらわれるのは、歌意の解釈などに関わる文脈であり、高度な教養として扱われている。このことから七五調の〈いろは〉は、手習いの場からは離れたところにあるようにみえる。

以上からすると、手習いの場で用いられる〈いろは〉は、比較的古くから七句切りのものであったようだ。これも、一旦歌としての形をもった七五調を介するわけではなく、直接七字切りのものを暗誦し、用いたものと思われる。

四．なぜ七字切りが用いられたか

以上、中近世における〈いろは〉についてみたが、七字切りと七五調とが、異なる文脈で扱われていることがわかる。これらをみていて、特に気になるのは、七字切りのものである。すなわち、なぜ手習いの場に、七字切りの〈いろは〉が用いられるのか。

韻律を持たない七字切りの〈いろは〉が、手習いの場で用いられるのは、この読み方が歌意を持たない故に、仮名遣いや濁音にとらわれないものであったため、と考えることはできる。歌意が隠されるこの区切り方であれば、仮名を一文字ずつ学習するのには都合がよい。しかし、素朴な疑問として、七五調で読む伝統が存在していたのであれば、七五調に載せた文字の羅列として読んでいても良いはずである。つまり、七五調であっても、文字のままに読めば歌意を隠すことはでき、積極的に七字切りをとる所以はない。なぜこのような形ではなく、わざわざ七字切りの形がとられていたのか。

七字切りの〈いろは〉に言及したものとして、小松英雄（一九六四）がある。同論は仏教テキストに見られる〈いろは〉が、七字切りであらわれることに注目したもので、特に『金光明最勝王経音義』にあらわれる七字切りの〈いろは〉に言及した。そしてこれが、漢字音の声調学習の便宜から、七字の区切りをとったと指摘した。これによれば、〈いろは〉を七字に区切ったのは、このように区切った上で、独自の節を付して読むことで、漢字音の声調パタンを網羅させる目的によるということになる。つまり、同論の考え方であれば、漢字音学習の場における利用法では、七字切りをとる理由が説明できる。更にいえば、仏教サークルにおいては、七字切りをとる〈いろは〉が、積極的に採用される理由があったといえよう。

本稿で問題としている、手習いの場における七字切りの〈いろは〉の利用も、これと連続的に捉えられるものではないだろうか。つまり、手習いの際の〈いろは〉の使用法は、仏教

サークルで用いられていた読み方が、そのまま流用されたものではないか。

先に確認したように、〈いろは〉には七五調で仮名遣いを意識して読むものと、七字切りで仮名遣いを意識せずに読むものの二種が存在していた。このような状況が、〈いろは〉を手習いに使用する前から存在していたとすると考えやすい。すなわち、〈いろは〉を「手習い歌」として学習に用いようとした際に、既に仏教サークルにおいて、歌意を隠し、文字の羅列として読む七字切りが確立されており、手習いのために既存の読み方が選択された、ということではないか。また、七字切りの読み方が存在していたからこそ、〈いろは〉が手習いに使用されたと考えることもできるかもしれない。いずれにしても、後世において、手習いの場などで用いられる、仮名一覧としての〈いろは〉が七字切りであるのは、〈いろは〉が教材として採用された際の読み方が、踏襲され続けたためということになる。現段階で特に具体的な例証を挙げることは出来ないが、少なくとも、別の目的によって確立された七字切りの読み方が、そのまま手習いに応用されたとすれば、疑問に対して答えやすい。

この想定によれば、七字切りの〈いろは〉を選択することで、はじめて〈いろは〉を手習いの場に使用することができたということになる。これは〈いろは〉の創作が、手習いを目的としてないとする見方[9]を支持するものだろう。

また、一般論からすれば、〈いろは〉を歌の形にするほうが、手習いに望むにあたって、記憶に役立つように思える。しかし、先に確認したとおり、手習いのはじめに覚える〈いろは〉は、すでに七字切りのものであったし、七五調のものは、やや高度な教養として扱われるものであった。また、手習いの教材としては、そもそも初めから七字切りの形で採用されたと考えられるとした。そうであるなら、手習いのためには〈いろは〉が本来歌の形であったことは、実はそれほど重要ではなかったということになろう。

更に、仏教サークルにおける〈いろは〉の使用法が、手習いの場に応用されたとした。これは〈いろは〉歌が仏教サークルにおいて作られ、それが広まったと考えられることから、それほど不自然な想定ではなかろう。この想定は仏教サークルにおける文字教育の実態を窺う手がかりとなりうる。

なお、直接本論には関わらないが、他の手習い歌との関係についても触れておこう。古くから手習いに用いられた教材として、〈なにはづ〉や〈あさかやま〉といった和歌が知られている。またこのほかに〈あめつち〉などが用いられた記述があるといった状況は、仮名学習の教材としての手習い歌が同時に複数存在していたと考えることもできよう。教材として、仏教的な場で用いられた〈いろは〉を選択するか、古くからの和歌を用いた〈なにはづ〉を選択するかといった、学習方法の選択は、一種の流派のようなものとして、棲み分

けていたのではないだろうか[10]。ただ、この点についてはあくまで想定に過ぎず、現段階では可能性を挙げるに留めておく。

五．まとめ

以上、中近世を通して、手習いなどで用いられる、仮名一覧としての〈いろは〉には、七字切りのものが多くみられることを確認し、これが七五調の〈いろは〉とは区別されて扱われていることを指摘した。そして、なぜ韻律を捨てた七字切りの読みが用いられてきたのかという問いに対して、本来は漢字音の声調学習用に使われていた方法が、手習いに応用されたため、とした。

文献上の用例も少なく、論も十分とはいえないが、ここでは一応の見通しを述べたつもりである。少なくとも、手習いの場における〈いろは〉が、七五調の今様体ではなく、七字切りの形で受容され続けてきたという点は、教材としての〈いろは〉の利用実態として、より注目されても良いのではないか[11]。

注

（1）須原屋茂兵衛刊。架蔵本には最終丁に「蔓延元［庚申］年九月求」（一八六〇年）の書込が見える。

（2）菊屋喜兵衛他刊。架蔵本では刊記の一部が破損しているため、判読不能の箇所があるが、東京学芸大学望月文庫蔵本によって補った。同文庫の目録では本書の書名を「女実語教／女今川／女商売往来」とする。

（3）高橋愛次（一九七四：五七）

伊呂波の書き方は色々あり、四句の偈に対応して四行書にする方法が最も普通に知られてゐるが（三九頁参照：原注）、次のやうに七音七行で区切つて書くことも稀ではない。古辞書の見返しなどの落書（多くは片仮名）には多く見える所であり、古辞書、例へば節用集の上下等の区切り方も之に基づくといはれるが、一方空海の真蹟と称する大和国当麻寺や、出雲国神門寺などに残つてゐる伊呂波も、平仮名で次のやうになつてゐる、

いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうゐのおく
やまけふこえて
あさきゆめみし
ゑひもせす

（4）国立国会図書館蔵。成立は元禄九（1696）年、如得（志水）による。書写は宝暦十一（1761）年、通心（行雄）による。いずれも奥書による。以下に本書の本奥書の年次及び書写奥書を示す。

本奥書（最終丁表）
元禄九丙子歳季穐日　棄門如得老人書之。
如得ハ名、志水（シスイ）禅僧也。無所住ノ人也。
八幡河口邑安楽寺二毛寓居。

（※「如得ハ～」以下は後の増補であろう）
書写奥書（最終丁裏）
宝暦十一辛卯天正月中三鳥以岩城以託房之。
本書写之畢。　京智山月之端館林　通心

行雄

（5）原文では「いといなき」と読めるが、「いときなき」乃至「いとけなき」の誤りと考えられる。ここでは、当該のかなは「起」のくずしを誤まったものと判断し、「いときなき」を採用した。

（6）吉野屋藤兵衛刊。刊行年などは使用テキストの解題による。

（7）虎明本では、この後に読み方を変えさせて読ませる展開があるが、「いろはを一へんいふ。そのことく口まねする」として、記述を省略しており、詳細は分からない。ただ、近世中後期の書写とされる、愛知県立大学蔵の『和泉流秘書』には、この場面が省略されずに、記されている。

シテ「すれは此方の口真似を致のて御座るか。アト「先其様なものちや。そつにとも違ふと聞ぬそよ。シテ「心得ました。アト「いろはにほへと。シテ「〳〵。アト「ちりぬるをわか。シテ「〳〵。アト「よたれそつねな。シテ「〳〵。アト「らむうゐのおく。シテ「〳〵。アト「やまけふこへて。シテ「〳〵。アト「あさきゆめみし。シテ「〳〵。アト「ゑひもせす京とおしやれ。シテ「〳〵。アト「只京と斗りをしやれ。シテ「〳〵。

愛知県立大学蔵『和泉流秘書』巻一「伊呂は」江戸中後期書写

さらに時代が下る書写であるため、同じように扱えるかには検討が必要だろうが、七字切りのフレーズごとに、いろはが読み上げられているのは、ある時期の実態とみてよいだろう。

（8）大矢透（一九一八）など

（9）亀井孝（一九六〇）、小松英雄（一九六四）など

（10）教材としての手習い歌が複数あり、それらが共存していたということは、それらを介して学ばれる仮名にも差があった可能性もある。山田健三（二〇一〇）では、〈あめつち〉を介して学ばれる、四十八文字の〈あめつち仮名〉という仮名セットを想定し、〈いろは〉によって学ばれる〈いろは仮名〉と別種のものと位置づける。このような仮名セットの違いが存在していたとすると、手習い歌の選択は、どの仮名セットを学ぶかという問題にも繋がりうるものだろう。

（11）二〇一三年に、京都旧堀河院跡で出土した土器に、〈いろは〉うたの墨書が見出された。これは一二世紀末から十三世紀初めのものと推定され、ひらがなで全文を書いた最古の〈いろは〉とされる。これは、その字の拙さなどから、習書かと目される。二〇一三年六月二十八日付けの読売新聞に掲載された復元を元に挙げると、次の通りである。

ゑひもせす
いろはにほへと
ちりぬるをわか
よたれそつねな
らむうゐのお
（く）やまけふこ
（え）（て）あさき
（ゆ）めみし
※（　）内は欠損部

これをみると、「ちりぬるをわか」や「よたれそつねな」といった句が、七字切りのもののようにみえる。これは、単に書写スペースによる偶然である可能性もあるし、そもそも当時の改行意識についても考えなくてはならず、傍証とは出来ない。ただ、これが

七字切りのような韻律を意図しない〈いろは〉の形であったとすれば、手習いの場における〈いろは〉の需要の姿を残すものともいえるのかもしれない。

参考・引用文献

遠藤邦基（二〇〇七）助詞「は」の「わ」表記―いろは歌の影響を通して―『國文学』九十一
大矢透（一九一八）『音図及手習詞歌考』
亀井孝（一九六〇）「あめつち」の誕生のはなし（『亀井孝論文集5』（大修館書店　一九八六）収録）
小松英雄（一九六四）阿女都千から以呂波へ『国語研究』十九
小松英雄（一九七九）『いろはうた―日本語史へのいざない―』中公新書
高橋愛次（一九七四）『伊呂波歌考』三省堂
野崎典子・小谷成子（二〇〇一）『和泉流秘書』（愛知県立大学附属図書館蔵）翻刻・解題一『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』二
馬渕和夫（一九五五）「いろはうた」のアクセント『国語学』二十三
矢田勉（二〇〇一）近世いろは歌研究史稿（上）『国文白百合』三十一
〃　（二〇〇二）近世いろは歌研究史稿（中）『国文白百合』三十二
〃　（二〇〇四）近世いろは歌研究史稿（下）『国文白百合』三十五
〃　（二〇〇六）無相文雄『和字大観鈔』について『文化學年報』二十五
山田健三（二〇一〇）「男手」考―宇津保物語の用例をめぐる平安書記システム記述―『日本語学最前線』和泉書院

参考・引用テキスト

『文武寶林古状大成』：架蔵本
『女寺子調法記』：架蔵本、および東京学芸大学望月文庫「往来物目録・画像データベース」http://library.u-gakugei.ac.jp/lbhome/mochi/mochi.html（請求記号 T1A0/26/60）
『以呂波抄』：「国立国会図書館デジタルコレクション」http://dl.ndl.go.jp（請求記号847-68）
『新版増補男重宝記』：『重宝記資料集成　第十一巻』（臨川書店　二〇〇六）
『和字大観鈔』：早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/（請求記号：ホ02 00074）、および矢田勉（二〇〇六）
『仮字本末』：早稲田大学図書館「古典籍総合データベース」（請求記号：ホ02 01329）
『大蔵虎明本狂言集』：『古本能狂言集』（岩波書店　一九四四）、および『大蔵虎明本狂言集の研究　本文篇』（表現社　一九八三）
愛知県立大学附属図書館蔵『和泉流秘書』：同大学図書館「貴重書コレクション　和本の世界」http://opac1.aichi-pu.ac.jp/kicho/wahon/index.html（請求記号773/1-7/25）、および野崎典子・小谷成子（二〇〇一）
『醒睡笑』：寛永版（古典文庫　一九六〇）、および『醒睡笑』（岩波文庫　一九八六）
天正十七年本『運歩色葉集』：『京都大学国語国文資料叢書一　天正十七年本運歩色葉集』（臨川書店　一九七七）

（やまだ・しょうへい　本学大学院博士後期課程）